

事例1 市部・公立

学校設定教科を学びの土台とし、 時代に対応する文理融合型の 新しい普通科を創る

熊本県・熊本市立必由館高校

特色化・魅力化の推進の背景

時代が求める普通科の学びを
現場の教師たちが模索

2024年度に普通科から文理総合探究科へと学科改編した熊本県・熊本市立必由館高校。2年間にわたる検討で校内の教師の合意形成を図った上で、探究を軸とする文理融合的な学びの実現に向けて、探究学習を始めとしたすべての学びを支える学校設定教科を設定し、キャリア教育や情報の充実に取り組み組んだ。さらに学年ごとの到達目標やその達成に必要な3年間の指導をグランドデザインに落とし込み、教師間で共有。その結果、学びに対する生徒の主体性の向上や探究学習の進路選択への寄与が、生徒の姿や声から確認されるとともに、教科を超えた教師間の連携も進んでいる。

2022年、熊本市教育委員会（以下、市教委）はこれからの社会を見据えて、主体的に学ぶ意欲や態度を育成する特色・魅力ある学校をつくるため、必由館高校に「新たな普通科教育を主とする学科」を設置し、教科等横断的・探究的な学びを充実させ、幅広い進路選択に対応する教育課程を編成する基本方針を示した（*1）。普通・国際・芸術・服飾デザインの4コースを設置する普通科であった同校はその方針に基づき、新学科名や教育課程の検討を始めた。佐藤宏一校長は説明する。

「前年度の21年度に素案が示されましたが、その内容は必由館高校のこれ

までの伝統にそぐわないのではないかとといった懸念の声が生徒や教職員、同窓生から上がり、22年度の基本方針へと改められました。校内においても、社会が大きく変化する中、必由館高校のよさを生かしながら、生徒が学ぶ内容を自らの将来と結びつけて、主体的に学びに向かう学校づくりをしていくという機運が高まり、市教委とも協議を重ね、22年度から文部科学省『新時代に対応した高等学校改革推進事業』の採択校として、新しい普通科への改編に向けた検討が始まりました」

生徒の希望進路や興味・関心が多様化する中で、文系・理系を横断した視点を持ち、個別最適な学びを実現する必要性を多くの教師が実感していたと佐藤校長は語る。「何を教えるか」から「どのような資質・能力を育成する



カリキュラム開発・研究部
渡邊 健己
わたなべ・けんいち
同校に赴任して3年目。
理科（生物）。



デジタル推進部長
宮川 和之
みやがわ・かずゆき
同校に赴任して6年目。
情報科。



カリキュラム開発・研究部長
中島 千晴
なかしま・ちはる
同校に赴任して3年目。
音楽科。



進路指導主事
花川 貴三子
はなかわ・きみこ
同校に赴任して24年目。
英語科。



教頭
森田 勇
もりた・いさむ
同校に赴任して6年目。



校長
佐藤 宏一
さとう・ひろいち
同校に赴任して16年目。

*1 熊本市教育委員会「市立高等学校・専門学校改革基本計画（必由館高等学校編）」

どう進める？高校の特色化・魅力化

—生徒を主語にした学校づくりに向けて

か」への転換を図るべく、育成を目指す資質・能力の明確化も含め、市教委と同校の教師が検討を重ねた。2年間にわたる学校教育目標や新学科の教育課程の検討を経て、同校の普通科は、探究学習を軸とする文理融合の教育を特色とする文理総合探究科（文理・芸術・生活デザインの3コース）に改編し、24年度に1期生を迎えた。

具体的な取り組み

学校設定教科で、地域と連携した探究学習を支える

市教委と同校の協議の上で決定した新学科のキャッチフレーズ（現在の学校教育目標）は、「出あう つながるとともに創る」必由館でやりたいをカタチに」。新しい教育課程の特徴は「すべてを統合的に学習する」ことだ（図1）。文理融合的な学びの軸となる探究

学校概要

設立 1911（明治44）年
形態 全日制／文理総合探究科／共学
生徒数 1学年305人

2025年度卒業生進路実績 国公立大は、高知大、福岡教育大、佐賀大、熊本大、大分大、宮崎大、鹿児島大、北九州市立大、熊本県立大、沖縄県立芸術大などに48人が合格。私立大は、駒澤大、武蔵野音楽大、龍谷大、福岡大、熊本学園大、崇城大、立命館アジア太平洋大などに延べ357人が合格。短大・専門学校進学80人。就職7人。

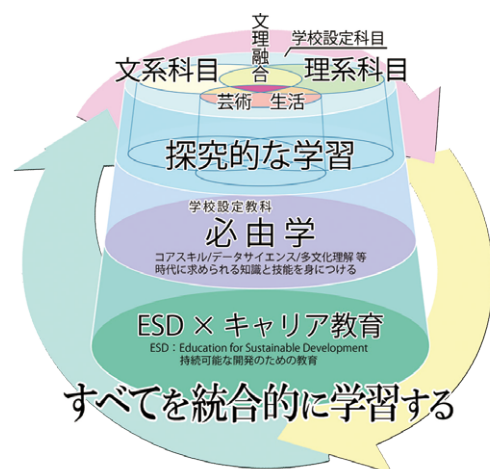
学習では、「感じる探究」イベントを開催。市役所や企業等のブースを生徒が巡り、地域・社会課題に触れて探究のタネを見つける。その後も各所と連携しながら、生徒が地域のおさや課題を自分ごととして捉え、課題解決に必要な思考力を3年間を通して育成する。様々な「ひと・もの・こと」に出あい、つながり、課題を設定し探究する中で、生徒は教科の枠を超えて知識を結びつけ、文理双方の視点を活用。成果を年度末の「探究フェスタ」で発表する。

探究を軸とする文理融合的な学びを支えているのが、1・2年次で必修の学校設定教科・必由学だ（図2）。

「必由学は、コアスキル・データサイエンス・多文化理解を柱とする、これからの社会ではばたか

ための基礎力の育成を目的として、週あたり1コマ実施しています。職業人へのインタビューや熊本の課題に関するデータの分析、海外との交流などを通して、探究学習はもちろん、すべての教科・科目に必要で、生徒が実社会に出てからも役立つ資質・能力を育てています」（カリキュラム開発・研究部長・中島千晴先生）

図1 文理総合探究科での学び



※学校資料をそのまま掲載。

24年度からDXハイスクールに採択されている同校では、必由学とDXハイスクールの取り組みを連動させた教科等横断型の学びも推進している。

「必由学で身につけた情報処理のスキルを生かして、体育や部活動で生徒たちが撮影した動画を基に動作解析を行ったり、探究学習の中で一流のアスリートと高校生とのフォームを重ね合わせて比較したりするなど、数理的アプローチに挑戦する生徒もいます」（デジタル推進部長・宮川和之先生）

半導体産業の拡大に伴い、熊本県内のデジタル人材の需要が急増する中、同校は25年度から市教委や熊本大学と共同して、小・中学生・高校生のDXと理系分野の基礎・応用力の育成を目指す。

図2 学校設定教科・必由学で伸ばす力



※学校資料を抜粋して掲載。

指す「みらいの科学者・DX人材共創プロジェクト」に探究学習の中で取り組んでいる。

「地域の小・中学生が理系・デジタル分野に興味を持つきっかけとなるよう、本校の生徒が教師役になり、小・中学生を前に電子顕微鏡や分光光度計といった機器を使って実験・観察を行います。本校の生徒にとっても、大学や企業が持つ最先端の機器に触れるよい機会となっています」（カリキュラム開発・研究部・渡邊竜己先生）

そのように、同校の生徒たちは必由学で身につけた様々な資質・能力を探究学習の中で実践的に発揮することで、高校での学びの価値を実感しながら教科の学びも深めている。

特色化・魅力化の推進のポイント

議論の進捗・内容を丁寧に見直し、目指す教育の形を可視化

普通科改編までの2年間の議論で管理職が留意したのが、校内の約70人の教師との合意形成だ。管理職・探究部長・教務主任などが参加し、週1〜2回の頻度で実施した「コア会議」では、新学科の教育課程について検討。コア会議のメンバーに各コースの主任や教科代表者などを加えた約20人が参加し、月1〜2回の頻度で実施した「学校改革プロジェクト委員会」では、学校設定教科・科目の研究などを行ないながら、各教科・分掌に議論の進捗を共有した。森田勇教頭は「会議は情報共有の場であり、教科を超えたコミュニケーションの場でもあった」と語る。

「会議では、教科・分掌を超えて先生方が率直に自分の考えや思いを語り合えるような雰囲気づくりに努めるとともに、少人数の話し合いは、できるだけ多くの先生にその様子を知ってもらうために、会議室ではなく、あえて職員室内のミーティングスペースなどを利用するようにしました」

そうして編成された教育課程の実施を経た24年度と25年度に、卒業を間近に控えた3年生を対象としたアンケート調査を行ったところ、総合的な探究

の時間を始めとする探究学習が「自分の進路に大きく影響した」「将来、社会に出ていく上で役に立つと思う」と答えた生徒の割合はいずれも90%以上だった。校内で開放されている最先端の設備を整えた「デジタル探究室」に自主的に集まり、創作活動や探究学習に取り組むなど、主体的に探究学習の問いを立て、課題に取り組む生徒も増え、教師たちは手応えを感じている。

加えて、問題解決に向かう際の生徒の強みや行動特性を把握するために、25年度には1・2年生がベネッセの「GPS-Academic（*2）」を受検した。

「本校の生徒の強みである協働的思考力が向上していることが、『GPS-Academic』の受検結果で明らかになりました。必由学で身につけたスキルを生かした探究学習を通して、どのような資質・能力が生徒に育まっているのかを検証し、生徒が自身のキャリア形成に生かせる支援のあり方を考えていきたいと思っています」（進路指導主事・花川貴三子先生）

生徒の変容を起点にした本校の特色化や魅力化を追求し続けるため、26年度には学年ごとの到達目標やその達成に必要な探究学習などの流れを明確化した「グランドデザイン（図3）」を完成させた。それにより、必由学ではいつ、何を学んでいるのか、身につけたスキ

図3 総合的な探究の時間、必由学、情報、キャリア教育をつなげる3年間のグランドデザイン（抜粋）

【学年テーマ：夢を持とう!!】自己の興味・関心に基づく問いを深め、将来像を明確にするとともに、その実現に必要な論理的・批判的思考力や情報活用能力を育成する。探究活動や地域連携、発表の機会を通して、実社会とつながりながらキャリアビジョンを具体化する。
【手立ての重点】・校内外での発表機会の充実 ・地域（市役所等）との連携による社会との接続 ・キャリアビジョンの明確化と設計

		4月	5月	6月	7月
2年生	・キャリア教育 ・アセスメント ・LHR	スタディー サポート	コース選択 のための 進路探究	コース選択 のための 進路講演会 GPS- Academic	進研模試 (7月記述)
	総合的な 探究の時間	③個人探究（コースに分かれて探究を行う） 			
		【問いの設定】 スキル D、I		【情報収集（フィールドワーク、外部講師）】 スキル B、C、E	
	（必由学Ⅱ スキル）	I：自己の現状を客 観的に分析し、計 画を立てる SWOT分析・学習 理論	J：思考の可視化・事象 の多角的分析・データ 収集を実践する Visible Thinking・多文 化比較・アンケート設計	K：質問力の向上・ 課題解決・データに 案を行う 質問力・在留外国人	
情報Ⅰ	F：【知識】知的財産権（著作権）、個人情報、情報セキュリティ、 情報モラルなど				

*学校資料を基に編集部で作成。総合的な探究の時間に書かれている「スキル」は、必由学で身につけるもので、具体的にどのスキルを用いるのかが明示されている。



グランドデザイン全体は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/> または右の2次元コードからアクセスしてください。



ルを各教科の授業などにどのように生かせようか、すべての教師が考えやすくなった。グランドデザインを見た教師から、「各教科で協働的な学習が本格化する時期を考慮すると、人間関係の構築に必要なスキルを習得する必由学の授業は、もう少し早く実施した方がよいのではないか」といった声が上がりが、教科や分掌を超えた指導改善につながる意見交換が早速行われた。

佐藤校長が大切にするのは、「ビジョンを明確に示しつつ、教師の挑戦を支えることだ」。

「必由学は、導入後2年間は有志の5人の教師がフロントランナーとして

指導計画を立案し、授業を担当しました。3年目となる26年度からは、これまでのノウハウを共有しながら、約70人の教師全員で取り組んでいます。チームティーチング形式を取り入れ、各教師には、必由学で生徒が身につけるスキルのうち、自分が得意とするものを踏まえて担当する授業を選んでもらうなど、先生方が安心して挑戦できる環境づくりをしています」（佐藤校長）

文理や教科、さらに学校の枠を超えて地域と連携した学びを実現した必由館高校。生徒たちが感じている自校の学びの価値を、同校の教師たちも確かに感じ取っている。

*2 ベネッセが提供する、「思考力」「姿勢・態度」「経験」の3つの観点から、問題発見・解決する力を測定し、生徒一人ひとりの「強み」を明らかにするアセスメント。